「抒情詩」から「抒情歌」へ

川端康成「抒情歌」を読んで

総合科学部　日本文学・科目履修生
鈴木綾子

『抒情歌』は川端康成が三十三歳の作で、青春の傷痕として長く尾を引いた失恋事件を深部に秘めた「愛の物語」だが、川端の死生観や宗教観も漂っている。主人公の龍枝が既に死んでいる恋人「あなた」に語りかける形を取り、「思い出と夢」「神秘と幻想」が綾なす、詩情豊かな「悲恋の抒情詩」でもある。

龍枝は、「人間の涙の一粒のような象徴抒情詩としてこの世に生まれた女」だという。

本文で「抒情詩」という言葉は八回使われているが、題名にしている「抒情歌」は一回も使われていないのが、不思議に思った。

「生前の生き方や個性が、死後の世界まで引き継がれていく悲しい人の習わし」が作品のテーマだと思う。龍枝は恋人の死の悲しみ

と、嫉妬と怨念に覆われていたとき、仏法の経文の抒情詩に出会う。そこで今世で生きていたままの恋人に向かうより、紅梅に生まれ変わったと思って語りかける方がうれしいことを知る。紅梅に語り始めた部屋で、香が嗅覚を刺激して脳の記憶を呼び覚まし、過去の香を思い出させた。それは四年前のある夜、風呂の中で突然襲われ、気が遠くなった激しい香である。「私を振り棄て、私に黙って結婚なされ、新婚旅行のはじめての夜のホテルの白い寝床に、花嫁の香水をお撒きになったのと同じ時」と予知能力を示している。

龍枝は自分を棄てた恋人に対する恨みと、愛する人を奪った綾子に対する妬みに、情念の焔を燃え上がらせ、この怨念が恋人を死に追いやってしまったという懊悩が、心の奥底で渦巻いていたのだろう。愛欲と悟りのせめぎ合いの中で、あくまでも純粋に、真っ直ぐに生きる方法を求めていくという作者自身の考え方の表れだと思う。

川端は「抒情詩」を書いていく中で、今世と来世の間に奏でる音律が生まれ、そのゆるやかなリズムに身をゆだねて書き上げた後で、「抒情歌」という題名に置き変えたのではないだろうか。「詩」から「歌」（音楽）に展開する川端の芸術的感性であると感じた。

最後に再び心霊学の教えを否定し、紅梅か夾竹桃の花となって、花粉を運ぶ胡蝶に結婚させてもらうことができれば、死人にもの言うこともないと締めくくる。

来世に於いても、この世の姿と同じ人間に生まれ変わり、恨みや妬みの人間臭い悲しみを繰り返すより、それらを超越した美しく清らかな花との結婚を熱望するが、現実的に人間が紅梅や夾竹桃になることはない。川端が究極に目指した世界とは、自と他が一つになり、自分さえよければというエゴイズムを乗り越えた世界を創造することにあったのではないだろうか。主人公の龍枝が愛する恋人の死の悲しみと、女の情念に悶える地獄の境涯

から、仏教のありがたい「抒情詩」によって這い上がり、「死の超越」ともいうべき「悟り」を体得した時、ありがたい「抒情詩」が、壮麗なる「抒情歌」となって、静かに宇宙に流れていくのかと誘導された思いが残った。